

海は島にとつて 能動態か受動態か？

菅田正昭

かつて「アマ」の靈性に包まれていた「シマ」は、シマに内包されていた「クニ」の〈国〉化によって〈島〉化し、「鬼ヶ島」として孤立させられていく。受動的疎外から能動的疎外へ、国から忘れられた存在へと転位した島の精神史を解き明かそうと試みる。

「クニ」の〈国〉化がもたらした 「シマ」の〈島〉化

まずは、おさらいから始めたい。アマから天と海が分岐され、海がウミと呼ばれるようになる以前、クニはシマに包含されていた。ところが、海がウミと呼ばれていく過程で、クニは国への昇華を開始する。もちろん、この場合のクニとは「天に対しての」単なる「陸地・土地」の義であり、国のほうは多少なりとも統治の装置を持った存在としてののである。その一方で、アマの靈性に包まれていた

シマは、天から分離され、島として海の中に置き去りにされる。

これがクニの〈国〉化によるシマ疎外の始まりだ。そのあげく、本来はクニがシマの内部に含まれていたのに、国によるシマ疎外の受動態としての〈島〉化への強制的論理的帰結として、ここで主客が転倒して、島があたかも国に含まれている存在であるかのように理解されていく。このとき、島はアマ（天と海が混在一体となっている）の靈性を剥奪され、実際は、海によって国から隔絶された、いわゆる《離れ島》となる。すなわち、isolateされて、島は国

の〈飛地〉とされていく。いうならば、^{トカゲ}蜥蜴の尻尾のように、いつでも切り捨てられる運命を背負わされているということがある。

単なる陸地としてのクニの、いわゆる島ではない部分の国の中にあるシマも、このとき本来の意味が失われる。アマの契機の喪失によって、シマは全面的に疎外される。人びとはシマの原義が思い出せなくなっていく。国精神が形成されていくことで、その対極としての島精神は疎外の受動態から能動態への転位を余儀なくされる。この場合の国精神を「国的なる社会の精神性」、島精神を「島のなる社会の精神性」と捉えていただいてもよい。

すなわち、島の疎外が国の統治の確立によって最初は受動的に生じてきたのに対し、やがて島が自ら疎外されることを能動的に選び取ったと勘違いされてしまうのだ。国がそう思うだけではなく、島に住む人も島の疎外を諦念として受容してしまうのだ。その諦念は本来、受動態としての悲しい受容であったにもかかわらず、能動態としての選択のように思われてしまうのだ。そして、シマの疎外の能動態が確立したとき、島に住む人びとは島国根性の持ち主だと、国精神によってア・プリアリに決め付けられてしまうのだ。

この場合のシマとは、神々によって聖別された土地のことである。シマが疎外されて島になっても、島はそのシマ

という音韻（言霊）を留めているため、幾分かその霊性が遺っている。ここで、神や至高の霊的存在が嫌いな人たちのために、神を「カミガミ」と言い換えてもよい。さらに、アニズムさえも否定したが、もつとゴリゴリの唯物論者たちには、生態系を維持していくための、死者と生者と、これから生まれてくるであろう人類の、時空を超えた^々全共闘^々が、カミガミの共同体としてのシマなのである、と提示したい。

海に背を向けたのは

〈島〉ではなく〈国〉の側

少なくとも弧状列島に住み続けてきた古代人の認識である〈クニ（国土）生み〉神話では、イザナギ・イザナミ両神の夫婦交合の結果として、まず島々が、そのあと神々が生まれてくる。学者たちは慣習的に「国土生み」と呼んできたけれども、実際は「島生み」神話なのである。しかし、「島生み」という事実を目を向けず、今なお左翼系の学者も含めて「国土生み」神話と呼び続けているのである。島の疎外を神話時代の古代からの既定事実として、固定化させようとしているわけである。もちろん、「島」という視点を欠落させれば、「海」の気配も感じることができないのだ。

〈アマ〉抜き（のシマの疎外）の延長上の、〈海抜き〉（島の疎外）という歴史的^々精神史的事実。〈島の疎外〉の固定

化という現実の中で、離島住民はそこからの脱却を念願してきた。『離島振興法』の旧第一条は「本土より隔絶せる特殊事情よりくる後進性を除去するため」と、その「目的」を謳っていた。すなわち、そこには「海」によって本土（クニ）より isolate されているのが「離島」である、という認識があったからである。

その典型として「外海孤立」型の島々が存在した。とくに、その中の小型離島の場合は「隔絶せる特殊事情」の「後進性」を最も如実に示していた。宮本常一先生いうところの「海に背を向けた」さらに「忘れられた島」々であった。もちろん、「海に背を向けた」くて向けているのではなく、「海に背を向けさせられている」のである。

「海に背を向けた」島々は一見、能動態のように見えるかもしれないが、じつは、〈疎外〉の受動態である。一方の「海に背を向けさせられている」島々は、その逆で、受動態のように思えるかもしれないが、isolate している側の識見^{しきけん}閣下^{かつか}では能動態―受動態の関係は逆転する。そうした状況の中で、『離島振興法』は〈島の疎外〉のその現実を、社会政策として解消させようと努力してきたわけである。

現行の『離島振興法』の第一条は「我が国の領域、排他的経済水域等の保全、海洋資源の利用、自然環境の保全等に重要な役割を担っている離島」として「離島」を位置づける。つまり、そこには「海」という文字は見えないけれ

ど、海を最大限に意識している。いいかえれば、「島」に「海」の靈性を取り戻そうとしているかのように思える。

もちろん、そうはいつても、離島の現実には甘くない。そこで「産業基盤及び生活環境の整備等が他の地域に比較して低位にある状況」の「改善」が謳われる。しかし、旧一条のような「本土より隔絶せる特殊事情よりくる後進性」の「除去」という姿勢ではなく、あくまでも「離島の地理的及び自然的特性を生かした振興」というふうに、ここでも明らかに「海」の靈性の復権へ感情移入がある。

しかし、不思議なことに、『離島振興法』の「目的」を記した第一条には、新旧とも「海洋資源」という文字が一ヶ所だけ出てくるものの、肝心の「海」という語が登場しない。それは記紀神話の、いわゆる「国土生み」神話についてもいえることだが、〈国〉という統治装置に座している官吏たちは、古代から「海」という字が嫌いだっらしい。極論すれば、島が海に囲まれている、という嚴肅な事実を無視したいようなのである。

わたしは前号（二一四号）の本誌に「海と島を蔑ろ^{ないがし}にできた日本人の精神構造」を書いたが、あえて言うなら、官の海を蔑ろにする精神構造がここにも現われている、といえるだろう。海への遠慮を超克しなにかぎり、離島振興や、海洋基本法が対象とする諸問題、さらに領土問題……等々を、本当に議論することもできないのである。いいか

えれば、アマから天と海が分岐していく過程で、国はシマの続きとしてクニがあったことを忘れ、海の中に島を放置して、じつは国が「海に背を向けて」しまったのである。

研究史から抜け落ちている 海と島の存在

じつは、戦後の思想史、精神史の中では、海に論及することは異端視された。「転向」のメルクマールだったのである。そして、この場合の「転向」とは、単なる「方向・立場などをかえること」ではなく、「共產主義者・社会主義者などが権力の強制などのために、その主義を放棄すること」（広辞苑）の義で用いられた。というよりも、〈左翼〉〈左派〉〈進歩勢力〉から〈右翼〉〈右派〉〈保守勢力〉への転換が「転向」として断罪の対象となったのである。ちなみに、戦後民主主義の中では、その逆コースは〈民主的〉なるものとして、大いに歓迎されたのである。

ところが、民俗学の創始者の柳田國男も、ある種の〈転向者〉として見なされた。民俗学の草創期の柳田國男は、その関心を〈山人〉研究に向けていた。読んで字の如く「山中に隠棲する人」（広辞苑）の義だが、柳田が関心を抱いた〈山人〉には単なる山の民や天狗ばかりでなく、共同体の外側にあつて各地を流浪する漂泊民のすべてが含まれた。すなわち、木地師・イタカ・サンカ（山窩）・毛坊

主・唱門師・舞々・鉢屋・鍛冶師……等々の漂泊する宗教者や芸能者や職人、被差別部落の民衆たち（ちくま文庫『柳田國男全集4』の長池健二「解説」の総称だった。その〈山人〉研究を中断して〈常民〉研究へと移行し、さらに海や島への強い関心を持ったことが「転向」と受け取られたのである。

この〈常民〉という概念は民俗学独特のもので、『広辞苑』によれば、「普通の人びと。エリートでない人々。英語の commons に相当し、平民・庶民とほぼ同義であるが、柳田國男・洪沢敬三らは、日本文化の基底を担う人々の意をこめてこの語を用いた。」とある。しかし、柳田は「日本文化の基底を担う人々」としての〈非常民〉≡〈山人〉たちの研究をしてきたわけであり、〈山の神〉が春先になると山から降りてきて里の〈田の神〉になるように、〈山人〉から〈常民〉としての〈里人〉へ研究対象を若干シフトさせてきただけなのである。実際、常民の中には出自が非常民という人も多く、民俗学は〈非常民〉と〈常民〉との間の茫漠たる境界にいるマージナル・マンへの関心を持ち続けてきたのである。

その微妙な軸足の移動を「転向」と宣告されたのではたまらない。柳田批判の、じつは〈柳田学〉者たちは、〈常民〉研究を天皇制への屈服過程と見ているのである。彼らは、常民を天皇制の〈枠内〉の、それに対する非常民を

〈粹外〉の人々と考える傾向があり、その〈粹〉を絶対視するのである。問題はそう単純ではないのである。それとも、彼らは〈山人〉などの非常民は「日本文化の基底を担」ってきた人たちではない、とでもいうのであろうか。

もともとは漂泊民だった人々が漂泊の自由を奪われ、ある一ヶ所に定住を余儀なくされる場合もあるからだ。被差別部落もそうだし、じつは、離島の住民も同様だ。海から漂泊する自由が奪われたのが離島の民なのだ。これがシマや島の疎外だ。柳田國男の〈山人〉から〈常民〉への研究の「転換」を「転向」と見る民俗学者や思想史学者には「海」や「島」がすっぱりと抜け落ちていくことが多い。「島」を組上に載せるときでも「沖繩」だけである。それはウツナーが天皇制の粹外に位地しているからである。

宗教・芸能系の漂泊民の出自 —— 海人

民俗学の黎明期の柳田國男が〈山人〉研究から始めたという事実のせいも、柳田批判の〈柳田学〉者たちは漂泊民の出自を〈山人〉と考えがちだ。ところが、少なくとも宗教・芸能系の漂泊民の場合の出自は〈海人〉である。たとえば、記紀神話には、いわゆる「海幸・山幸」の、次のような有名な神話がある。

弟で山幸彦のホヲリ（ホホデミ）はあるとき、兄で海幸

彦のホデリに対して、お互いの猟（漁）の道具を交換しようとして提案する。しかし、山幸は兄から借りた釣り針を失くしてしまふ。そこで自分の剣を千本の釣り針に鑄直して兄に献上しようとしたが、結局は許してもらえなかつた。海辺で嘆いている山幸を見て、波間から塩土老翁しおつちのわじが現われて「間なし勝間の小船」を作つて山幸を乗せて、海神の宮へ渡らせた。山幸は豊玉姫と三年間を、ここで過ごした。そして、鯛が飲み込んでいた釣り針を取り戻し、塩満珠しおみつたまと塩乾珠しおかたまという二つの宝玉をもらつて地上へ帰還し、苦しめた兄・海幸に報復する。

この「海神の宮」の話は、『丹後国風土記』の与謝郡の「水江の浦の嶋子」（いわゆる浦島太郎）が訪れた「海中の博く大きな島」（いわゆる龍宮城）の光景を彷彿とさせるが、地上世界への帰還後の山幸は兄の海幸を塩満珠で溺れさせ、海幸が命乞いをする塩乾珠で水を引かせて救つたという。かくて山幸の孫は神武天皇として即位し、一方の海幸は『古事記』によれば、山幸のため「昼夜の守護人となつて仕へ」るようになり、その子孫は「今に至るまでその溺れし時の種々の態、絶えず仕へまつるなり」とある。その「溺れし時の種々の態」が芸能化したのが隼人の舞であるといわれ、大嘗祭おほなほまつりのときにも奏じられているのである。ちなみに、この「海幸・山幸」神話は、九州の海洋民族のハヤト族が大和朝廷に服属するようになった経緯を神話化

したものといわれている。

神話の時空としては若干、遡ることになるが、『古事記』の「八千矛の神の歌物語」には、「事の語りごともこをば」という詩句が三ヶ所に登場する。「この事は、その通りことです」の義だが、これを伝えたのは一種の語り部としての天馳使である。この「天」を神聖の意のアマと捉える見方もあるが、アマセハセヅカヒのアマは「海」の義なのである。海洋民は海を漂泊することによって独自のネットワークを形成していたが、そのネットワークを利用して「走り使い」系の語り部をしたのである。おそらく、弧状列島の海辺の状況を把握していたと思われる。もちろん、天馳使も「歌物語」を伝承しているように、海人系の芸能集団であった。

ところで、盆踊りの起源は平安中期の空也上人の踊り念仏に発し、鎌倉時代の時衆（時宗）の祖で出自が河野水軍の一遍上人の念仏踊りに由来するが、民俗芸能史的にはもともと古代の海洋民の舞踊に遡る、といわれている。すなわち、宗教と芸能は漂泊する海人によって結びつくのである。ところが、「柳田」嫌いの、その内実は「柳田」好きの「柳田学」者たちは、〈山人〉のカテゴリーに捕らわれて、海や島が存在を忘却するのである。ちなみに、わたし自身は柳田國男から南方熊楠へいったん回帰し、さらに、折口信夫を通して宮本常一を見る、という視座を採っているつ

もりである。

疎外され 蔑視の対象と化した島

天と海が分離する以前のアマに存るシマの典型が〈龍宮城〉Ⅱ〈海神の宮〉としての「島」であった。「海幸・山幸」神話においても「浦島伝説」においても、「島」は宝と豊穡の世界であった。いうならば、ウツナーのニライカナイであり、ヤマトウーの常世であった。アマのシマからクニへ代償を求めずに宝や豊穡をもたらすのである。

ところが、アマが天と海に分離され、シマが疎外され、国から^{island}islandされて島になると、時に征服の対象へと転位する。その典型が桃太郎に退治された〈鬼ヶ島〉である。「桃太郎の話では、討つ側の桃太郎が主人公である。鬼は悪者とされ、桃太郎は一方的に鬼の住む島へ攻め込んで彼らを殺し、財産を奪ってくる。鬼に対しては、何の同情もみられない。」（大和岩雄『鬼と天皇』一九九二年、白水社、一二四ページ）

だが、桃太郎の〈鬼ヶ島〉の場合は、まだ宝・豊穡の島の意が漂っている。しかし、「桃太郎」以後の〈鬼ヶ島〉は、ニライカナイや常世のイメージが剥奪されている。単に〈蔑視〉の対象に過ぎないのである。〈鬼ヶ島〉の異名を持つ青ヶ島の元・住民としては、甚だ不満である。島の

疎外の極致が、討たれる存在としての、国から忘れられた「鬼ヶ島」なのである。

『鬼と天皇』の著者の大和氏は、鬼の訓みが古くはモノであったことから、カミには神と鬼神、モノには物・者と鬼の両義があると捉えながら、鬼の本質を天皇制との係わりで肉薄していく。その手法は実に見事であり、鬼を討つ側と鬼とが実は相互浸透し、相互転換していく過程を鬼の立場に感情移入しながら暴いていく。だが、それは「山人」への思い入れの視点に立つての感情移入である。折角「鬼ヶ島」に言及していても、ミサキ（いわゆる岬の義と、葬儀の先導の両義がある）の、さらに先の「奥の（沖つ島）」としての「鬼ヶ島」が、零落したアマである海によって陸地から精神的にも物質的にも隔絶されている、という事実には気がついていないのである。ちなみに、わたしは、

すがたまさあき
菅田正昭

昭和20年東京生まれ。学習院大学法学部卒業。同46年から49年まで東京都青ヶ島村役場職員、平成2年から5年にかけて同村助役を務める。主著に『日本の島事典』（三交社）、『アマとオウー弧状列島をつらぬく日本の靈性』【隠れたる日本靈性史】（たちばな出版）、『古代技芸神の足跡と古社』（新人物往来社）、『第三の目』（学習研究社）ほか多数。現在、自身のホームページ「でいらほん通信」で独自のシマ論を展開している。日本民俗学会会員。



モノを物・者の本質・本体、物をモノの容れ物と考えている。

じつは、零落した島といえども、島は海神の神籬ひもろぎなのである。ミサキのサキはサカ（サカヒ）と同義というのは柳田國男の説（石神問答）だが、その意味は「坂・堺・境・界」である。すなわち、陸地（クガ、クニ）と海を隔てる境界が「岬」なのである。本来、その岬は精神構造的には「島」との架け橋の意味合いを持っていたが、天と海が分離していくとき、その意味も失われていった。島はクニの生者たちに忘れられていくとき、祖神たちの集う島としての意も忘れられ、死者の島へと閉じ込められていく。まさに、葬はよりの先導としてのミサキの遙か向こうは、「鬼ヶ島」でしかないのだ。『大祓詞』おほはらえのこほの「荒潮の潮の八百道の八百会」の「大海原」では、どんな穢れも洗い清めてくれる清

浄の靈性を持っているのに、そのことが忘れられてしまったのだ。

大和岩雄氏は『古事記』や、『日本書紀』から『三代実録』に至るいわゆる『六国史』、さらに『日本靈異記』や『今昔物語集』『御伽草子』『謡曲集』……等々を典拠に論を展開する。とくに、大和氏は討たれる鬼の典型として酒呑童子を登場させている。酒呑童子は謡曲にも登場するが、室町時代成立の『御伽草子』のそれが最も知られている。「浦島太郎」も「一寸法師」も「ものくさ太郎」などもこの『御伽草子』に登場してくる。

ところが桃太郎の鬼ヶ島は、江戸時代の享保年間に流行った赤本に採り上げられるまで、事実上、埋没していたのである。明治に入って、巖谷小波が『日本昔噺』叢書として「桃太郎」を発表（一八九四）して以来、ようやく人口に膾炙するようになったのである。ただし、伝説じたいは

岡山市の吉備津彦神社と吉備津神社の祭神である大吉備津彦命（第七代孝靈天皇第三皇子）を桃太郎に、討たれる側の鬼に温羅（百済の王子という）を擬したものである。

すなわち、桃太郎の場合、浦島太郎や一寸法師などと比べると、民間伝承の度合いがより濃いのである。いいかえれば、鬼ヶ島は『御伽草子』以前から埋没していたと考えられることもできるし、江戸中期になって、蔑視の対象としての「鬼ヶ島」が確立したといえなくもない。巖谷小波の「桃太郎」には、海は「急ぐほどに來る程に、はや此処は東海の端です。前面を見渡せば、只茫茫漠々として、更に眼に遮る小島もなく、岸打つ波は簪々として、寄せては返す有様は、さながら海の底に物あつて、水を掻き廻すのかと疑はれます」（平凡社東洋文庫）として描かれているのみである。海も島も疎外されているのである。